

---

# 魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

本知そら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

### 【Nコード】

N8792X

### 【作者名】

本知そら

### 【あらすじ】

足を滑らせて学校の屋上から落下した僕『加志崎える』は、突如現れた『穴』に吸い込まれ、魂だけの姿となって異世界へと飛ばされる。消滅しかけていた僕を助けてくれたのは『リーデ』という少女。吸血鬼の国『カメラリア』を統治する姫であり、隣国からは『魔王』と恐れられる『吸血姫』だった。彼女は僕の魂を自身に取り込むことによって僕を救ってくれた。感謝する僕に彼女は体の主導権を渡してこう言った。「私、一度で良いから旅行してみたかったのよ」。助けられた手前、彼女の願いを叶えることにした僕は付人の

『テイルラ』と共に旅に出る。その後、カメリアを出て最初に訪れた町で、僕は『打倒魔王』を掲げる『勇者』と出会い、あろう事が彼を弟子にしてしまう。これは『魔王』である僕を打ち倒すことを目標とする『勇者』を弟子にした僕が当てもなくぶらぶらと世界を旅する物語。……え？ これって僕やられちゃうわけ？ 主人公最強設定の性転換物（男 女）です。

## 第1話 えるとリーデ part 1

どれだけの時間が過ぎたのだろう。数日のようにも思えるし、数分のようにも思える。

どんなに目を凝らしても自分の手すら見えない、黒以外の色が存在しない空間。僕はその中をふわふわと漂っていた。

……漂っていた？ いや、それも疑わしい。なんせ自分の手さえ見えないほどの漆黒の闇。あまりにも暗すぎて右も左も上も下も分からないうから。地に足も付いていないし、平衡感覚なんてとうに失っている。

少しの気分の悪さと不安を抱えながら、じっとしたまま暗闇の中を漂う僕。

一応これでも最初の内はいろいろと試した。だがどれもこれも今の状況を打破するには至らなかった。むしろ不安を煽るだけだった。それにしても、どうしてこんなことになったんだろう。僕はただ学校の屋上で足を滑らせて落ちただけなのに……。

って、全然『ただ』とか『だけ』で済まされることじゃないって！ 屋上から落ちたんだよ！？ 死にそうだったんだから！

一人でボケツツコミ。長いことここにいるせいで頭が回らなくなってきた。

少し冷静に考えよう。とりあえず、あのまま地面に激突していたら僕は間違いなく頭の中身を大衆にひけらかしてぼっくり逝ってしまった（表現をマイルドにしてお送りしています）ので、今の状態はどちらかと言えばまだマシな方では？ もしあのまま地面にゴールインしていた場合、きっと学校の屋上の使用がPTAで問題となり、せつかくの生徒の憩いの場である屋上が僕のせいで使用禁止になっていただろう。そうなるとそれは僕の歴代ワースト一位の黒歴史となり、みんなに合わせる顔がない僕は卒業するまでは家に引きこもり、それがずるずると続いて、果てはニートに……って、

その時は僕死んでるから考えるだけ無駄か。あつはっは……。

で、僕って今生きてるの？

質問に答えてくれる人がいるはずもなく、僕の問いかけは暗闇の中に解けて消えた。

屋上から落ちたあのととき、僕は迫り来る地面との衝撃を覚悟し、けれども自分の最期くらいはしっかりと目に焼き付けようと、意味のない意地を張って地面を凝視していた。すると突然目の前に黒い丸い穴のようなものが現れて、僕はそれに吸い込まれるようにして落ちてしまった。

そして現在に至るわけだけど……もしかしてさっきの穴に落ちる一連の流れは死ぬ間際に見た幻覚で、僕はすでに死んでいて、ここが死後の世界だとか？

そうだとすると……なんて味気ない世界なんだ。四方八方暗闇のこんな世界で、次の転生まで待てというのだろうか。あんまりだ。あんまりすぎる。せめて暇つぶしにテレビだとか本くらい置いててほしいものだ。

『あなた、よくそんなのんきなことが考えられるわね』

ふいに声が聞こえた。それは小さく微かなものだった。

どこからだろう。

辺りをキョロキョロと見回していると、再び声が聞こえる。

『こっちこっち』

遠くで何かが光った。小さな小さな点のような光だけど、それは暗闇の中にいた僕には酷く眩しかった。

『あなたは自分が今どこにいてどういう状況か分かってるの？』

「それがさっぱり。なんとなく死後の世界かなあ……って考えてたところ」

声が出た。いや、出るかどうかなんて試してなかったけど。

『自分が死んでいるかもしれないのに、その落ち着き払った態度は呆れを通り越して尊敬すらするわね……』

光の強さが一瞬弱まった。なんとなく溜息をついているように見

えた。

「ところで見知らぬ人……人ですよね？」

『一応私は人間ね』

一応？ まあいいや。

「僕って死んでます？」

『半分死んで半分生きているってところかしら。今あなたは肉体を失い、魂だけになって、この世界をふわふわと浮いているだけの不安定な存在よ』

「ああ、幽体離脱ってやつですね」

『そう言われると酷く軽い感じがするのは何故かしら……』

そりゃ魂だけになったら重量的に言えばふわふわだと思う。

『そう言う意味じゃないわよ』

心を読まれた。この人実は神様じゃ？

『人間だってさっき言ったでしょ？』

人間。つまり超能力者というやつなのかな。そんな人とテレビ越し以外で初めて会ったよ。ごめんなさい。ずっと『胡散臭い』なんて思ってたごめんなさい。『スプーンなんて曲げて何の役に立つの？』とか捻くれたこと考えてごめんなさい。

『いえそんなことはどうでもいいから……あなた早くしないと死ぬわよ？』

痺れを切らしたかのように唐突に突きつけられた余命宣告。いやまあ実際痺れを切らしたんだろうなあ。全然話進んでないし。

『あなたがそんなこと考えるから進まないのよ』

ごもつともです。でもそんなあなたも毎回僕に付き合うのがいけな

『あなた死にたいの？』

「続きをどうぞ」

死にたくないの为先を促す。

『時間がないから簡潔に話すわよ』

「できれば初めからじっくり聞きたいです」

『いつそのこと死ぬ？』

「ぜひ手短にお願いします」

なんか楽しくなってきた。死にかけてるらしいけど。

『次ふざけたら、それはイコール死だと思いなさい』

厳しめの口調だけど、きっと彼女は最後まで僕を見捨てることはないんだろうなあと思う。なんとなく。

『このままだとあなたは後数分足らずで間違いなく死ぬ。もしあなたが自殺志願者ならそのまま死ぬのも良し。もし生きたければ……』  
光が強くなった。眩しさで目が眩む。

『その光に触れなさい』

視力を取り戻したときには、光は一筋の線になり、僕のすぐ傍にまで伸びてきていた。

もちろん僕は考える必要もなくその光に触れた。

光のはずなのに、何故かそれは暖かった。

『あなた生きたかったのね』

「そりゃまあ、僕はまだ十六歳の取れ立てピチピチの高校生ですから」

『死にかけているのにピチピチなのね』

彼女がくすりと笑ったように思えた。

『でもいいの？ 次に目が覚めたら犬になっているかもしれないわよ？』

彼女の言葉に少し驚く。たしかに彼女は『元の姿で』とは言っていないかった。

でも……と考える。

「それならそれで犬畜生になって旅にでも出て、自由の身を存分に楽しみますよ」

『旅ねえ……。それもいいかもしれないわね』

「でしろう？」

『ふふ。まあ安心しなさい。ちゃんと人間にしてあげるから。ただ、元の姿、とはいかないけれど』

「常に前傾姿勢前向き思考の僕ならそれだけでオールオッケーです」  
『そう。その言葉は本当?』

「はい」

どうせなくなっていた命だ。たとえ別人になって別の人生を歩むことになるうとも、生きていられる、それだけで十分儲けものだろう。

『後悔はしない?』

「はいっ」

力強く頷く。とは言っても彼女に見えているのかどうかは分からない。

『……分かったわ。じゃあ、少しの間我慢してね』

その声を合図に、光の線がぐるぐると僕を縛り始める。幾重にも重なった光の線が束となり、太い縄のようになると、僕をここから引きずり出すように強い力で引っ張られた。

感覚を失った僕でも感じるほどの強い衝撃を受けながら、少しずつ光の光源へと引っ張られていく。

その光は徐々に大きくなり、やがて僕を包み込むように全身を照らした。

その暖かい光に包まれながら、僕は意識を手放した。



## 第1話 えるとリーデ part 2

「んん……」

瞼越しに光を感じて目を覚ます。ぼやけた視界の先から暖かな光が降り注ぎ、優しい風が頬を撫でる。

目を擦りながら上半身を起こし、背伸びをする。

あの暗闇の中を漂っていたせいだろうか。少し頭がクラクラする。船酔いに似た気持ち悪さを感じながらも、今の僕は機嫌が良かった。生まれ変わったというか、脱皮したというか、そんな清々しい気分だ。

……ん？

少しずつ鮮明になる視界に違和感を覚える。それを確認するため、ぐるりと辺りを見回す。

そこは見慣れない部屋だった。壁や床はキラキラと光沢を放つ石（大理石のようなものだろうか）で敷き詰められ、備え付けられた家具や調度品には異様に凝った細工が施されたものばかりが並んでいる。よく見ると今僕が座っているベッドも三、四人は寝られるんじゃないかと言つくらい大きく、天蓋まで付いた高級感の漂うものだった。

「な、なにこの中世ヨーロッパの貴族の寝室みたいな部屋は……？」  
当然の疑問を一人呟く。

「やつと起きたのですか？ もうお昼ですよ？」

「ひゃっ!？」

誰もいないと思っていたところに突然声を掛けられ、心臓が飛び出そうなほどに驚く。反射的に声のした方を向くと、そこには少女が一人、僕に背を向けて立っていた。

彼女はカーテンを開き、大きな窓を開け放す。薔薇の良い香りが窓から流れ込んでくる。

「ほら、こんなに良い天気なので、久しぶりに散歩に出られ

てはどうですか？」

少女が振り返り、僕に微笑みかけながら言う。

「え、あ、う、うん……」

どう答えて良いか分からず、とりあえず頷いておく。

「？ どうしたのですか？ いつもと様子が違うようですが」

そんな僕の様子に怪訝な顔をする少女。

……えーと。誰？

失礼だとは思いつつも彼女を凝視する。

少女はフリルがたくさん付いた黒いワンピースにエプロンをした、所謂メイド服を身に纏っている。長い黒髪は大きなリボンで結び、ポニーテールにしている。身長は一六〇あるかないかと言ったところで、歳は十代中頃から後半、僕と同じ年くらいに見える。

ここまでの説明で彼女の姿を想像すると、きつとそれは日常的に見慣れた生粋の日本人になるだろう。だが、金色の瞳が彼女を日本人ではないことを伝え、そして頭に生えた狐のような長い耳が彼女を『ただの人』ではないことを訴えていた。そして同時にその事実、今僕がいる世界が元いた僕の世界とは違う世界だということを如実に現わしていた。

いやまあなんとなく分かってたよ？ あの神様みたいな女の子に助けられた辺りからなんとなくは。

部屋の内装、とりわけシャンデリアに立てられた蠟燭を見て、この世界が元の世界よりも文明が遅れていることを知る。

それで、今の僕は一体どういう状況？ この少女は何者？ 口振りから僕のことを知っているようだけど、それはなぜ？

……だめだ。疑問符が頭に浮かびすぎて知恵熱出そう。

「そんなにわたしの顔をじっと見つめて、何かあったのであぁ、そういうば昨日別の世界からいらした見知らぬ方と『同化した』のでしたね」

パンツと手を打ち鳴らす少女。また一つ疑問が増える。

「あなた様とはこれが初対面ということですね。それは失礼いたし

ました」

深々と頭を下げる。そしてゆっくりと顔を上げ、

「それでは自己紹介から。わたしは獣人のティルラ・ホリー。リーデ様のお世話係です」

スカートを摘み上げ、上品に挨拶をするティルラさん。

お世話係……ってことは、これが噂のリアルメイドさん？

メイドさんなんて人を初めて見た僕は少なからず感動する。

こんな可愛い女の子がメイドだったら毎日楽しいだろうなあ、なんて下世話なことを考える。

ところでリーデ様って誰だろう？

「これからよろしくお願いします。リーデ様」

僕の心を読み取ったかのように、ティルラさんは僕に微笑みを向ける。

一応後ろを振り向く。もちろん誰もいない。

僕は自分を指差して、

「リーデ様って僕のこと？」

「はい。その通りです」

優しい笑みを浮かべたままのティルラさんがゆっくりと頷く。

……あれ？

僕は違和感に気付く。

「あー、あー」

やっぱりだ。声がおかしい。いつもより高くて女の子みたいな声だ。

気になって喉に手を当てると、あるはずのものがそこにはなかった。

……ん……。あー、なるほど。何故僕がこんなところにいるのか、なんとなく分かってきた。

学校の屋上から落ちたその後、暗闇の中で死にそうになっているところを見知らぬ女の子に助けられた僕は、彼女によって元の自分ではない『リーデ様』となって生き返った。おそらくは『昨日まで

のリーデ様』が『同化』というものをしたせいでこうなったのだらう。

うん。なるほど。そういうことか。

つまり今の僕は……

「鏡、ご覧になりますか？」

「お、お願いします……」

ティルラさんが部屋の隅から大きな姿見を持つてくる。僕はざわつく胸を押さえながら姿見を見た。

そこには触り心地の良さそうなネグリジェを身に纏い、絹系のような銀色の長い髪をベッドに扇状に広げた、まるでおとぎ話に出てくる妖精のような少女が映っていた。じつとこちらを見つめる瞳は宝石のような青色で、小さな唇は綺麗な桜色をしている。透き通るような白い肌はきめ細かく、頬は化粧でもしているかのようにほんのりと赤い。手足はほっそりとしていて、触れば壊れてしまいそうだ。

年の頃は十代前半といったところだろうか。ティルラさんよりも一回りも二回りも小柄で、見方によっては小学生に見えなくもない。実際胸も『ある』とは言い難い慎ましさだし。

……と、他人事のように観察してみたけど、これが今の僕の姿なんだよね。

「はあ……」

自然とため息が漏れる。

いくらなんでも以前の僕と違いすぎる。真逆と言っても良い。

「どうしたのですか？　ため息なんてついて」

「人生山あり谷ありと言いますが、これはちょっと乗り越えるのは至難だなあ、と」

ティルラさんが「ああ」と呟き、

「心中お察します」

と眉尻を下げた。

ティルラさんが悲しんでくれるなんて思わなかった僕は慌ててし

んみりとした空気を打ち消そうとする。

「ま、まあ、あの時助けられていなかったら僕は死んでいたわけですから、それと比べると全然良い方ですよ。ちよっと以前の僕とは方向性が違うようですが、こんな可愛らしい女の子になれるのなら、これはこれで楽しいかもしれせんし」

出来るだけ明るく努めて言う。

『自分のことを可愛らしいって、ナルシストにも程があるわね……』  
「!？」

暗闇の中で聞いた声を耳にする。頭の中で鳴り響くようなその声がどこから来ているのかと周囲を見回す。

けどティルラさんと僕以外そこには誰もいなかった。

「リーデ様おはようございます」

ティルラさんにもこの声が聞こえているのだろうか。でもどうして僕を見つめながら言うのだろう。しかも『リーデ様』って。

『おはようティルラ。今日も眠気を誘う良い天気ね』

「寝てばかりいると牛になりますよ？ 今日のは気持ちのいい風も吹いていますし、久しぶりに散歩なんていかがですか？」

『そうね……。この子が良いなら私は良いわよ』

「本当ですか!？」

ティルラさんが僕の手を取り目を輝かせる。

「ではさっそく着替えの用意を」

「ち、ちよって待って！ この声は誰？ どうして頭の中から聞こえるの？ なんでティルラさんは僕の手を握ってるの？」

矢継ぎ早に質問をぶつけられたティルラさんが首を傾げる。僕の手は握ったままで。

「……もしかして、リーデ様から何も聞いていないのですか？」

リーデ様？ リーデ様って僕の事じゃ

『何も話していないわよ。この子がどういう反応するのか見てみたかったから』

「はあ……。またリーデ様はそうやって人を振り回す……」

「ね、ねえ。あなたは僕を助けてくれた人ですよ？ どこにいますか？ 姿が見えないんですけど」

クスツと笑い声が聞こえる。やっぱりそれも頭の中から聞こえた。『どこって、あなたのすぐ傍よ』

周りを見る。やっぱり誰もいない。

『もつと近くよ』

もつと？ もつとつてこれ以上近くは……ん？

ティルラさんと目が合う。ティルラさんはじつと僕を見つめていた。少しの微笑みを浮かべながら。

……まさか。

『そう。そこに私はいるわ』

あの時のように僕の心を読んだのだろう。この体の『本来の持ち主』であるリーデ様は嬉しそうだった。

そう。彼女は僕の中にいた。

『遅くなったけど自己紹介ね。私は吸血鬼のリーデ<sup>きゅっけつひめ</sup>カメラア。この国を治める吸血姫よ』

鏡の前の僕が意に反してにこりと微笑む。薄く開いた唇の間から、キラリと光る鋭い犬歯が見えた。

## 第1話 えるとリーデ part 3

鏡に映る今の自分をまじまじと見つめる。口を嚙んだその姿は可憐な美少女と言っても差し支えない。けれど、「いー」と口を広げて見えるのは、噛みつけば痛いどころの騒ぎじゃなさげな鋭い歯が四本。その常人よりも発達した犬歯は獰猛な犬を彷彿とさせ、幼さの残る彼女には酷くアンバランスに見えた。

でもそれは『儚げな美少女』として見た場合の話。見方を変え、犬歯もちよつと自己主張の強い八重歯と思えば、これはこれで良いのかもしれない。

論より証拠と、ニツと歯を見せて笑ってみる。

小悪魔っぽくていいかも？

『人のことを悪魔って呼ばないでくれる？』

「え？ あ、いや、そういう意味じゃなくてですね……ところでリーデ様」

『リーデで構わないわ。もうあなたは私なのだから遠慮は無用よ。もちろんティルラにもね』

と言われて「はいそうですね」といかないのが小心者の僕なんですけど。

『あなたのどこが小心者なのよ……』

ごもつともです。では……

こほん、と一つ咳払いをして気持ちを切り替える。

「ねえリーデ。今の僕は吸血鬼なんだよね？ やっぱり日光に弱かったり、にんにくや十字架が嫌いだったりするの？」

『日光に弱い？ なによその脆弱な生き物は？』

「いや、世間一般的な吸血鬼のイメージを言ったただけだけど……」と、そこで僕は思い出す。ここは僕のいた世界とは違うことを。

『ふーん。あなたの世界の吸血鬼は弱点だらけなのね。よくそんなことで生きていられるわね』

まあ空想上の生き物ですから。

『この世界の吸血鬼はそんなに粗末ではないわ。……強いてあげるなら、定期的に他人の血を摂取しないとろくに動けないことぐらいかしら』

「リーデ様の場合はピーマンも弱点ですが」

ティルラがくすくすと笑いながら言う。

『ティ、ティルラ!』

「申し訳ありません。リーデ様」

言葉だけなら真面目だけど、綻んだ口元はそのままだ。

「あ、そうだ。リーデ様」

「なに?」『なにかしら?』

僕とリーデが同時に返事をする。

「申し訳ありませんが、今のはリーデ様の方を呼ん……どちらもリーデ様だと不便ですね」

ティルラが顎に手を当てて軽く目を閉じる。

「……呼び方を変えましょう。リーデ様はそのままとして……」

そのリーデもどっちのことだろう。流れ的に僕ではなさそうかどうか。

「そういえばあなたの方のお名前を聞いていませんでした。お教え願いますか?」

「僕のこと?」

「はい」

あれ、言ってなかったっけ? たしか自己紹介の時に……って僕まだ自己紹介してないじゃないか。

『すっかり忘れていたわね』

そんな重要なこと忘れないでください。忘れていた本人が言えた義理じゃないけど。

「僕は加志崎える(かしぎきえる)。こっちの言い方だと、える」  
加志崎になるのかな」

「える様、ですか」



呟いて思案顔をするティルラ。リーデも声には出さないものの何か考えているようだ。

僕はと言うと名前を様付けで呼ばれたことなんて一度もなかった。こそばゆさを感じてもじもじしていた。

やがて向き直ったティルラは、

「変な名前ですね」

『ええ、変な名前ね』

「くはっ！」

心に多大なダメージをこうむる。自分でも薄々感じつつ、友達からも何度が同じように指摘された名前だけど、まさか初対面早々に言われたのは初めだ。

「どうしたのですか？」

白々しい台詞を吐きながらティルラが顔をのぞき込む。

「い、今の言葉は、僕の心をえぐるランキングの歴代三位に入ったよ……」

『変なランキングね。ちなみに一位は？』

「『なんだ男か』」

あれは今でも覚えている。街を歩いていたら突然数人の男に声を掛けられて、しかもナンパだと僕が理解して、彼らに自分は男だと伝えるまで気付かれなかったんだよなあ……。

『ふーん。良かったわね、本物の女の子になれて』

「そ、それはどうなんだろう……」

別に元の僕に不満があつたわけじゃないので一概にそうとも言えない。

「何か誤解をなさっているようですが、わたしもリーデ様もあなたの名前を貶しているわけではありません。ただ、女性としてその名前は変だと言ったのです」

「あ、そういうことなんだ」

たしかに『える』は女の子には向かな……そうでもないんじゃないか？

「あなたのことはあなたの名前で呼ぶことにしようと思ったのですが……そうもいかないようです。先ほど言った女性云々という問題もありますが、それ以上に『える』という名前がこの国ではあまり好まれていないのです。以前このカメリアの国に攻め入った軍の将校に『エル』という方がいたので」

「そっか、戦争か……。それなら仕方ないね」

さすがに人の感情に関わるのあれば諦めるしかない。まあ自分の名前に執着があったわけじゃないからどうでも良かったんだけど。

だったら僕のことなんて呼んで貰おう。女の子っぽいものがないというのなら、そうだなあ……

「ですから、あなたのことはエルリーデ様とお呼びすることにします」

「うん、分かった。エルリー……はい!？」

驚きに目を丸くしてティルラを凝視する。

「エ、エルリーデって、良いのそれで？」

えるとリーデ。二つの名前を繋げてエルリーデ。そういうことだろう。

「はい。あなたにはリーデという名前にも慣れて頂きたいので」

「そ、そういう理由があるのならそれでいいと思うけど……リーデはどう思う？」

『良いんじゃないの？ 少なくとも『える』よりは断然こっちな』

若干なげやり気味に聞こえたけど、リーデもこの名前を良しと想っているようだ。

他に良い名前も思い浮かばないし……うん。

「じゃあこれからはその名前でよろしく」

「分かりました。ではこれからはエルリーデ様とお呼びします」

こうして僕の新しい名前がエルリーデとなる。急造の名前のわりにはこの姿に合っている気がする。

「ああそうだ。ねえリーデ」

『なに?』

ふと僕は大事なことを言い忘れていたことを思い出す。

「ちゃんとお礼を言っただけでよかったからさ。ありがとう、僕のことを助けてくれて」

鏡に向かって深々と頭を下げる。ゆっくりと顔を上げると、僕は少し恥ずかしそうに笑っていた。

「別にお礼なんて良いわよ。私だって、無償であなたを助けたわけではないし」

無償で助けたわけではない？ リーデが僕なんかを助けることに何かメリットでもあるのだろうか。

「そのうち分かるわよ」

そう言った彼女の声はほんの少し悲しげだった。

## 第1話 えりとリーデ part 4

この世界にやってきて、早いものでもう一週間が経過した。

この一週間、僕はほとんど部屋から出ることなく、ティルラが持ってきた書物を読み漁っていた。

「最低限の知識は身につけてください」

そう言っただけ置いていったのは、どれも開くのを拒絶したくなるような分厚いものばかりで、積み上げれば天井に到達するんじゃないかと思うほどの量だった。その内容は様々で、このカメリアの国や世界各国の歴史及び地理、女性としての立ち振る舞い、そして魔法の詠唱法などなど。これらに目を通せば、この世界のことを広く浅く知ることが出来るとリーデは言っていたけど、ぶっちゃけ教科書参考書以外で読んだものと言えば赤ずきんにまで遡るほど『本』と無縁だった僕には酷な作業だった。というよりこれだけ読んでも広く『浅く』だなんて言われてやる気が起きるはずもなく、どうせ一、二冊だけ読んで、あとは部屋のオブジェと化するのだろうと思っていた。

ところがいざ開いてみると、どれもこれも知らないことばかりで僕は夢中になっただけで読み進めた。気づけば一週間足らずでティルラが用意した書物全てを読破したうえに、そのほとんどの内容を暗記していた。その事実気づいたときは驚愕したが、おそらくは『リーデ』となったことで、僕の趣味趣向が変化し、そして能力自体も『える』ではなく『リーデ』のものに取って代わったのだろう。そうでなければ、この僕が本に夢中になるなんてことはないのだから。

そんなわけで最低限の知識を得た僕は、今日初めて城の外へ行ってみることになった。

「なんかドキドキしてきた」

胸に手を当てると、心臓がいつもより数割増しで脈打っていた。着慣れたネグリジェから大きく肩の開いた青色のドレスに着替えた僕は、スカートを踏んでしまわないよう注意しながらゆっくりと廊下を歩く。

『堂々としなさい。あなたはこの国の姫なのよ？』

この頭の中から声が響いて聞こえてくる感覚にもだいぶ慣れた。ちなみにこのリーデの声は、彼女と同じ存在である僕と、常に傍らにいて、リーデから絶大な信頼を得ているティルラにしか聞こえない。……というより、リーデが僕達二人にしか聞こえないようにしているらしい。たしかリーデはこれを『精神魔法』と呼んでいた。

「一週間前まで庶民だった僕にそんなこと言われても……ところで疑問だったんだけど、どうして『姫』なの？ 普通『女王』じゃないの？」

「それがリーデ様のご希望だからです」

僕の斜め後ろを付いてくるティルラが言う。並んだ方が話しやすいのに。

『女王って響きが好きじゃないのよね』

……。

「え、それだけ？」

『それだけよ。他に何か理由が必要？』

ないけど、権力というものを垣間見た気がした。

慣れないパンプスでやつと城内から外へ出る。庭を通り城門へと向かう。

「お気を付けて行ってらっしゃいませ」

城門の傍らに立つ守衛さんが直立不動で敬礼する。

「えーと……ご苦勞様です」

ぎこちなく微笑み会釈する。その際に地面に付くほどの長い髪が肩にかかったので手で払い落とす。

『おお……』

……ん？

変な声が聞こえて守衛さんに目を向ける。何故か胃から覗く彼の顔は赤くなっていた。

「あの人もしかして風邪じゃないの？」

「違います」

前を向いたままのティルラが即答する。

「いやだつて顔赤いし……」

ティルラが小さくため息をつく。

「彼はリーデ様に見惚れていたのです」

「……な、なるほど」

納得。きつと僕だつて、こんな子に挨拶されたら緊張して声も出せないだろう。でもその対象が自分だということになんとも言えない気分になる。

城門を抜けて城下町へと出る。そこは部屋の窓からも眺めてはいけど、僕の想像していた吸血鬼の町とは程遠い、ごく普通の活気のある町並みだった。

「護衛とかそういうのはいないの？」

僕の周りにはティルラ一人しかいない。一国の主が自国とはいえ護衛もなしに出歩いて良いものだろうか。

「する必要がありませんから」

『むしろ邪魔とも言えるわね』

……？ まあいらないういうなら良いか。僕としてもこっちの方が緊張なくて済むし。

「あ、姫様だー！」

人通りのまばらな通りを歩いていると、通りかかった男の子が僕を見て声を上げた。

「姫様だつて？」

「本当だわ。リーデ様よ」

男の子の声を聞きつけた人々が僕の周りに集まってくる。まさかこうも早く見つかるとは……って、そりゃそうか。変装も何もしないんだからバレるのは当たり前だ。

あつという間に数十人の人垣が出来る。

「リ、リーデ」

『変わらないわよ。体動かすの疲れるし』

くっ……。こっちが言う前に言われてしまった。リーデはいつもこうだ。たまに体の主導権を返そうかと尋ねても、決まって「疲れる」やら「面倒」だと言って頑なに断る。結果、この世界にきてからずっとリーデの体は僕が動かしている。

この一週間で気付いたことの一つ。リーデは凄く面倒くさがり屋だった。

「ひめさまー。おからだのぐあいはいかがですか？」

小さな女の子が僕を見上げて話しかけてくる。僕が本を読んでいた期間は、公では風邪を引いたことになっているらしい。周囲を見回すと、僕を取り囲む誰もが心配そうに僕を見つめていた。

……仕方ない。ちよつと頑張つて対応してみよう。

「うん。もう大丈夫。ありがとう心配してくれて」

少し屈んで女の子の頭をそつと撫でる。

「えへへ」

女の子が嬉しそうにはにかむ。それと同時に周囲からも安堵のため息が漏れる。

「ですが姫様。病は治り際が肝心。くれぐれも無理はなさらないでください」

「はい。ご忠告感謝します」

その後も僕に労いの言葉をかけては深々とお辞儀をしてその場を去って行く人達。彼らの様子から、リーデが本当に国民から慕われていることを知る。

こんなにぐーたらなのに、どうしてだろう。

『エルリーデ』

『な、なに？』

『十秒後に目の前の女の子が躓いて転んでしまうわ。助けてあげてなんだ、ぐーたら発言に起こったわけじゃないのか……って、十秒後？』

疑問に思いつつも言われたとおりに目の前にいる女の子にすぐ手を貸せる位置に移動する。

そして十秒後。

本当に女の子は小さな石に躓いて体勢を崩した。すぐに女の子の手を取って引つ張り胸に抱く。

「大丈夫？」

「は、はい。ありがとうひめさま。こんどこそきをつけますっ」

女の子は顔を真っ赤にして何度も頭を下げてから走っていった。

今度こそ、ね……。

『今のは予知能力？』

『ええ。あなたにもそのうち見えるようになるわ』

そんな能力が凡人の僕にも宿るなんて、嬉しいやら恐ろしいやら。とにかく、なんとなく彼女がみんなから慕われている理由が分かった気がした。



## 第1話 えるとリーデ part 5

くう。

露天の立ち並ぶ通りを歩いていたら急にお腹が鳴った。男であればそんなに気にしないのだけど、今の僕はこの国のお姫様。アイドルがトイレになんて行かないというのと同じように、お姫様はお腹なんて鳴らさないのだ。……たぶん。

お腹を両手で押さえながらササツと周囲に目を走らせる。わざとらしく僕から目を背けあさつての方角を見るみなさん。きつと気を遣ってくれているのだろうけど、そうされると返って恥ずかしくなる。

「全てあの屋台のせいだ」

視線を向ける先には、美味しそうなお肉を串に刺して焼いているおじさんが一人。焼き鳥のようにたれを付けて焼いているようで、香ばしい香りが少し離れた僕の所まで漂ってくる。

そういえばこっち来てからお肉食べてないなあ。リーデがベジタリアンだからと毎日毎日緑の葉っぱばかり出されたせいで。

『いやならそう言えば良かったのに』

『嫌じゃないけど、そればかりって言うのがちよつと』

『何の話でしょうか？』

ああそうか。リーデと違って、ティルラには『声が届くように』

と念じながら考えないと、僕の声は届かないんだった。

『偏食はダメだって話』

『分かりました。明日からは料理のバリエーションを増やしましょう』

『う』  
『ありが……って、なんでさっきの一言だけで伝わるの？』

『エルリーデ様のことですから』

うーん。納得できたようなできないような……。ともかく、明日からのご飯は期待できそうだ。サラダばかりだったとはいえ、あれ

はあれで美味しかったし。

「ん？」

気がつくと目の前に美味しそうなお肉が。話している間に自然と足が露天に向いていたようだ。

ジュージューといい音が聞こえる。

……じゅるり。

おっと、よだれが出そうになった。

正直お金さえあれば迷わず買っていたところだ。けれど僕の財布はティルラが握っているし、なにより姫がこんな露天の

「おじ様。それを二つ頂けますか？」

今日初めて僕の隣に立ったティルラが財布を取り出して露天のおじさんに声をかけた。

二言三言交わして、硬貨と引き替えに串焼き肉を二本受け取る。

「どうぞ、リーデ様」

手に持つ辺りにハンカチを巻き付けた串焼き肉を差し出す。

ところでふと気付いたけど、ティルラは他人に聞こえる時は僕のことを『リーデ様』と呼んでいた。僕なんて未だに「エルリーデ」と呼ばれても反応が時々遅れるというのに。まったく器用な人だ。  
「いいの？」

目の前の串焼き肉に目を釘付けながらティルラに尋ねる。

「はい。お昼も近かったことですし」

いや、そうじゃなくて、

『姫ともあるうものが串焼き片手に食べ歩きなんて良いの？』

『問題ありません。リーデ様もしていたことですから』

凄い庶民的な姫様だな……。

「じゃあ遠慮なく」

ティルラから串焼き肉を受け取る。すぐにも齧り付きたかったけど我慢して、もう一つ疑問に思ったことを聞いてみる。

『……毒味とかはいいの？』

『毒味、ですか？ はい。必要ありません』

『本当に？』

たしかテレビで見た時代劇では殿様の食事に毒が盛られていないか確認するための毒味役がいたような。

『心配性ね。ティルラが良いと言ってるんだから良いのよ。……まったく。毒くらいで死ねたら苦労しないわよ』

『……それどういう意味？』

『冗談よ。私の体には常に魔力障壁が張ってある。少しでも私に害をなすものであれば弾かれるから安心しなさい』

魔力障壁……たしかそれは『障壁魔法』に分類されるもので、膜のようなものを自身又は自身の周囲に張り巡らせて外敵から身を守るといった比較的难度の低い防御魔法だ。この魔法は使い手によって大きくその性能が左右されるらしいのだけど……。

自分の体を見下ろす。そんなものはどこにも見当たらない。

『探知魔法を使わないと見えないわよ』

ああなるほど。不可視化しているのか。だったらえっと、探知魔法探知魔法……。

本で読んだことを参考にして、魔力障壁を可視化する魔法を想像する。

この世界の魔法には『精霊よ我に力を』云々の詠唱はなく、魔法名を叫ぶ必要もない。むしろ魔法に固有名がない。この魔法に名前がない理由は大きく分けて二つあり、一つが同じ系統の魔法でも使用者によって性質が変わること。もう一つは名前なんてなくても魔法を発動させることができること。この世界の魔法は想像するだけで発動する。その想像することを『詠唱』というらしいけど、人によっては想像しやすいようにと魔法名を独自に考えて決め、詠唱時に叫んだりしているのだとか。

頭の中で奇怪な紋様が浮かび上がる。この紋様は古代文字というもので、魔法詠唱に不可欠なものだけど、なんて書いてあるのかは誰にも分からないらしい。紋様が光を発しながら消えると、体中を何かが駆け巡るような感覚に襲われた。実際この時魔力が体中を駆

け巡っているらしい。その後一瞬視界がぐにやっとゆがんだ後、セピア色のフィルターがかかったかのように、世界の色が変わった。よし、上手く探知魔法が発動したようだ。

その状態で再び体を見下ろす。僕の体は淡い光に包まれていた。これが魔力障壁なのだろう。

ふと手に持った串焼き肉を見る。当たり前だけど光ってはいなかった。

「リーデ様。魔法もいいですが、早くしないと冷えてしまいますよ？」

「へ？」

隣に目を向ける。そこにティルラの姿はなく、僕の斜め後ろのさっきまでいた定位置に戻っていた。

ティルラはもう一本の串焼き肉を頬張っていた。

くう。

声を上げるお腹に急かされて、慌て僕も串焼き肉に齧り付く。久しぶりの肉料理だったこともあり、凄く美味しく感じる。でも少しお肉が大きい。リーデの口が小さいから少しずつしか食べられない。

もぐもぐと口を動かしながらティルラを見ると、彼女も僕のように淡い光で包まれていた。……って探知魔法発動したままだ。切っておこう。

「ティルラも魔力障壁張ってるの？」

「はい。リーデ様のものと比べると稚拙な出来ですが」

「ほえ」

ティルラという時間が長くなる度に、僕の中での彼女のスペックが上方修正されていく。

『世界中どこを探しても、ティルラ以上のお世話係はいないと思うわ』

『いえ、リーデ様の世話係たるもの、これぐらいのことはできないと』

いや、お世話係にそんな高スペックはいらないと思う……。

## 第1話 えるとリーデ part 6

「んん……」

瞼の向こう側に光を感じて目を覚ました。目を擦りながら怠い体をベッドから引つ剥がす。朦朧とする頭で部屋を見回すと、今日もティルラは背を向けて窓を開けていた。

「やっと起きたのですか？ もうお昼ですよ？」

最初の一言目はいつもこれだ。苦笑するティルラからはあきらめが見て取れる。ただ、その表情は優しげだ。

「ふあ……はふ」

あくびを噛み殺す。

「おはよう。ティルラ」

「おはようございます。エルリーデ様」

モシャモシャと頭を掻く。長い髪が前に垂れてきて視界を邪魔する。

「今何時？」

「十一時を回ったところです」

今日も盛大に寝坊だ。自分のことながら、よくもまあこんな時間まで寝ていられるものだと思う。

「起きようとは思ってるんだけどねえ……」

高校生にもなって（今は中学生くらいだけど）寝坊なんてどうかと思うが、この体が朝にとことん弱い体質らしく、この世界にきてからというもの、僕は一日たりとも一人で起きたことはなかった。吸血鬼だから朝に弱いのか？ と考えたけど、別に吸血鬼云々はまったく関係なく、単純にリーデが朝に弱いらしかった。それを証明するように、リーデは今も眠っている。羨ましい。

毎日ティルラの声で起きるのだから、きっと物音さえ耳に入れば起きられるのだろうだと考えた僕は、先日朝の必需品『目覚まし時計』を用意してもらったようにティルラに頼んだ。がしかし、この国に

は目覚まし時計というものが存在していなかった。

一人で起きるのは当分無理そうだ。

「ティルラが起こしてくれれば良いのに」

責任転嫁甚だしいことは分かりつつも、つい愚痴ってしまう。

「いつもそうしようとは思うのですが……気持ちよさそうに眠っているのに躊躇ってしまうのです」

何故か目をそらして頬を染めるティルラ。

「ふーん。まさか朝からずっと見てたなんてことはないよね？ い

くら何でもそれはないか。あははは」

「はい、ずっと見てました」

「ははは……は？」

返ってきた言葉に自分の耳を疑う。視線の先ではティルラが恥ずかしそうに俯く。

……これ、ティルラが男だったら危険だったんじゃないの？

ふとそんなことが頭を過ぎった。

「こ、これ着るの？」

下着姿でティルラが持つ洋服を指差す。

「はい。何かご不満でも？」

頭の上に疑問符を浮かべたような顔をして言われてしまった。

ティルラが持つその洋服は、たしか僕の世界ではゴスロリ（これは略称で、正式名称はゴシック・アンド・ロリータだったと思う）と呼ばれるものだった。黒と白を基調とした、フリルやレースをふんだんにあしらった洋服で、胸元と背中がざっくりと開き、スカートは膝上丈と短い。アクセントとして腰には大きなリボンが付いている。

見るには良いけど、まさか僕がこんな派手な服を着ることになるとは……。

「いつものドレスで良いんじゃないの？」

「あれは旅行には向いていません」

いやこれも似たようなものだと思う。

「ご安心を。ちゃんとドレスも数着ほど持って行きますから」

「そういう心配をしてるんじゃないんだけどね……」

まあここで渋っていても仕方ない。下着姿のまま口論するのも精神上よろしくないなので、早々に諦めて着替えることにする。

とはいっても、僕は足を上げたり腕を曲げたりと最低限の動作をするだけで、着替えはティルラに任せっぱなしだ。

ゴスロリ服に身を包むと、次にドレスサーの前に座らせ軽く化粧を施された。少しだけ大人っぽくなった顔に驚く僕を横目に、ティルラは僕の背後に立ち、櫛で髪を梳かし始める。

「今日は気合入ってるね」

鏡越しにティルラに話しかける。

化粧なんてされたのは初めてだった。この前外出したときだって化粧なんてしていなかった。

「当然です。今日は市民の大勢の方がエルリーデ様を見送りに来るのですから」

「はは、まさか。たかだか二、三年旅行に行くだけだよ？ 恨まれ

こそすれ見送りになんてそんな………大勢来るの？」

「はい」

即答される。

そういえばリーデは国民に人気があっただった。

「リーデ様がこの町から出ること自体十数年振りなのです。そのリーデ様を市民の方々が最後に一目見ようとやってくるくらい容易に想像できます」

「な、なるほど……」

まだ出発まで二時間以上あるのに、早くも緊張してきた。僕の予想ではティルラと二人でさっとお城を出て、さっと町を抜け、さっと城壁の外へ出て行くはずだったから。



「髪はどうなさいますか？」

「良く分かんないから、ティルラの好きなように」

そう言って鏡を見つめていると、ティルラは僕の右側の髪を少し取ってまとめ、その根元をリボンで止めた。反対側も同様にしてまとめ、ツーサイドアップにする。

「いかがですか？」

「うん。良いと思うよ」

ちょっと幼い感じがするけど。

「ありがとうございます」

ティルラは嬉しそうに微笑んだ。

それは数日前のリーデの一言が始まりだった。

僕は緑一色じゃない晩ご飯とお風呂を済ませ、あとは寝るだけという状態で、紅茶を飲みつつ本を読んでいた。

「私、一度で良いから旅行してみたかったのよ」

「旅行？ 突然どうしたの？」

鏡に映る自分、リーデに話しかける。別に鏡を見る必要はないのだけど、こっちの方が話しやすい。

「ほら、あなた言ってたでしょ。犬になって旅に出て、自由の身を乐しむって」

犬？ …… ああ、あの暗闇にいたときのことが。たしかにそんなことを言った気がする。

「それがどうかしたの？」

「あれからずっと考えていたのよ。私も旅に出てみたい。でも面倒くさい。どうしようって。そう悩んでいたときに、ふと気づいたの。今ならあなたが私を好きのところへ連れて行ってくれる。旅行に行くなら今しかないって」

いつもより若干語気の強い声が頭に響く。

気づかれてはいけないことに気づかれた気がする。

『そういうことだからティルラ。旅行に行く準備よろしく』

「分かりました。では、さっそく準備に取りかかります」

カップに紅茶を注いでいたティルラが僕に一礼して部屋を出て行った。

……え？　今のあれだけで決まったの？

『前々からティルラには旅行に行きたいと言っていたのよ』

「いやそういうことじゃなくて……一国の主がそう易々と国を留守にして良いの？」

いくらグータラ姫とはいえ、これだけは個人で勝手に決めるわけにはいかないだろう。

『もちろんちゃんと元老院から許可を取った上での話よ。それに姫とはいっても、政治その他諸々全ては昔から元老院に任せてある。』

しかもその元老院には彼らの監視役を数名紛れ込ませているわ。旅行中も常に彼女らと連絡を取り合うようにするから、あなたが思っているような心配は何一つないわ』

そっか……。そこまで考えているなら、もう僕からは何も言うことは無い。

「まあ、元々僕はリーデに助けられた身だから、リーデがそうしたいというなら、それに従うだけだけど」

『そう言う考えは止めてほしいって前に言ったと思うけど……今は私のために、その気持ちをありがたく受け取るわ』

後日、元老院にそのことを話したところ、とくに反対も何もなく、すんなりとオーケーを貰った。

そして本日、僕とリーデ、そしてティルラは、ただ単純に「旅行がしたい」というリーデの望みに従い、宛てのない旅に出ることになった。

もう必要なものは船に積み込んだ（船？）というティルラと共に数週間過ごしたお城を出て、驚くほど人の居ない通りを抜け、城壁の門へと向かう。

門が視界に入ると同時に、大勢の人の姿が見えた。そこには元老院のお偉いさんの面々を初め、この数週間で会った人、会ったことのない人、それら多くの人々が僕を見て手を振り、歓声を上げていた。中には涙ぐむ人もいた。

ただの私用で旅行に行くだけだ。特に目的があるわけでもない。それなのに、どうしてこんなにも人が集まり、好意的に僕を送り出してくれるのだろう。

『今はそんなこと考えないの。せつかく見送りに来てくれているのだから、笑顔で応えなさい』

『わ、分かった』

とりあえず疑問を押し込めて、出来る限りの笑顔で彼らに応える。何故か目尻が熱くなってきた。別に僕は悲しくもないし、泣くほど感動しているわけでもない。いや、ある程度は感動しているのだけど、それよりも疑問の方が大きかった。おそらくこの涙はリーデのものだろう。リーデの強い感情は僕を通して表に出る。きっとそれだろう。

城壁の門を抜け、先導するティルラの後を付いていく。少しずつ歓声と町とお城が遠ざかるなか、僕は少し寂しさを覚えた。

第1話 えるとリーデ part 6 (後書き)

第1話 えるとリーデ 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8792x/>

---

魔王で吸血姫ですが勇者と旅をしています

2011年10月29日22時05分発行